SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

病院内学級での造形教材開発及び授業実践における現状と課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 髙橋, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006845

〈論文〉

病院内学級での造形教材開発及び授業実践における現状と課題

髙橋智子

The Present Conditions and Perspectives in Development and Practice of Teaching Materials of Arts and Crafts of the Class in Hospitals

Tomoko TAKAHASHI

【Abstract】

A study is a part of development the teaching materials of arts and crafts for children of the class in hospitals. As a part of this study, I practice regularly a class of the arts and crafts of a sickly class in Shizuoka children's Hospital from 2006 while cooperating with teachers of the class. Through the practice, I considered a viewpoint for the development of teaching materials of arts and crafts of the class in hospitals. The Purpose of this thesis is that I consider the various problems that teachers feel at development and practice of teaching materials of arts and crafts of the class in hospitals. The consideration based on the teacher's questionnaire. I analyzed the various problems that became clear from teacher's questionnaire and expressed it to a classified list.

【キーワード】　病弱・身体虚弱教育　病院内学級　図画工作　美術　造形教材開発　授業実践

はじめに

現在、静岡県立こども病院内に設置されている病弱教室・訪問教育「きらら」（以下「きらら」とする。）において、担当の教員と協力を行いながら造形教室を継続的に実施している[i]。その目的は、実践を通して、病弱・身体虚弱教育（以下、「病弱教育」とする。）における造形・美術教育の可能性を探り、その教育に関わる教員が、実際に教育現場で活用・応用することのできる造形教材の開発を行うためである。

病弱教育において、造形・美術教育の教材・教具の開発に関する研究は少なく、現場の教員は子どもの実態に合わせた造形教材開発を手探りで行わなければならない[ii]。「きらら」においても、造形教室実施前に図画工作・美術の授業に関する現状把握を行った際、病弱教育に携わる教員の多くが図画工作・美術の造形教材開発に関して課題を抱えていることが分かってきた。造形教室では、教員たちが感じているこれらの課題の解決のために、独自の教育目標を教員と共に設定し、さらに病院内学級や児童生徒の実態、学習環境などをもとに、病院内学級における「造形教材開発の視点」の考察を行い[iii]、実践を積み重ねてきた。

「造形教材開発の視点」は、病院内学級における造形教材開発の糸口となるものである。この視点を病弱教育の現場にフィードバックすることで、現場の教員がこの視点をもとに造形教材を開発し、授業実践を行っていくことが期待できる。実際に現場にフィードバックし、その可能性を検討していくことは今後の課題である。しかし、現場の教員が造形教材開発及び授業実践を行っていくためには、「造形教材開発の視点」の提示を行うだけでなく、造形教材開発及び授業実践の際に感じている様々な課題を把握し解決していく必要もある。

そこで本論では、「造形教材開発のための視点」を現場にフィードバックする前段階として、造形教室へ参加してきた教員たちが、造形教材開発及び授業実践に対してどのような課題を感じているのかを、これまで実施してきた教員アンケートを手掛かりに考察していく。

Ⅰ　病弱教育における造形・美術教育

病弱教育において実技を伴う教科は、児童生徒にとって楽しく意義深いもの[iv]であるとされ、その指導の改善・充実が一層望まれている。先行研究では、全国の病院内学級において全授業時数に占める図画工作の割合が高いことが示されている[v]。「きらら」においても、造形教室実施前に行った教員への聞き取り調

静岡大学教育学部

査で、子どもたちの造形に対する興味関心が高いことが分かっている。子どもたちは体調の優れない時でも、他の教科に比べると積極的に活動に取り組むということであった。その後、定期的に「きらら」の教員に造形教育の必要性について調査[vi]を行ってきているが、これまで全ての教員が様々な視点から図画工作・美術の重要性を指摘している（表 1）。病弱教育において、造形・美術教育の果たす役割は大きいと言えよう。

Ⅱ　病院内学級での造形教材開発

病院内学級において、重視されている造形・美術教育であるが、現場の特殊性によりその造形教材（教具も含む）の開発については現在も課題が多い。病弱の子どもたちは、それぞれが抱えている病状も異なり、個々の状態に応じて様々な制限を受けている。また、入退院も流動的であり、子どもによって学習の進度の違いもある。それゆえ、教科学習上には、「学習の遅れを補うこと、身体活動の制限を考慮すること、経験不足を補うこと、少人数制の弊害の克服[vii]」などの配慮が必要となる。また病弱教育の現場では、その他にも「教員の病弱教育の経験者が少なく[viii]専門性の蓄積や困難であること、研修の機会が不十分であること、施設・教材・予算が不十分であること[ix]」なども課題として指摘される。病院内学級では、以上のような子どもたちの多様なニーズや配慮、課題を視野に入れた造形教材開発が求められる。

Ⅲ　「きらら」の造形教材開発及び授業実践の現状

1. 造形教材開発及び授業実践の課題

「きらら」においても、造形教室実施前の調査から、造形教材開発に関する様々な課題を現場の教員が感じていることが分かってきた。また、その課題の多くが図画工作・美術の教育内容や教育方法に関するもの[x]であったことから、造形教材開発のみならず授業実践に関する様々な課題を教員たちが感じていることも分かってきた。この教員たちの実態を受けて、まずは図画工作・美術の教育目標の明確化が必要であると感じ、造形教室における目標を設定し、教員の共通理解[xi]を図った。次に、病院内学級の特色や在籍している児童生徒の実態などをもとに、造形教材開発に必要な視点の考察を行った。病院内学級では、それらの実態把握が、造形教材開発において重要なポイントとなる。これまで継続的に実施している造形教室では、病院内学級の特徴や子どもたちの実態をもとに考察した「造形教材開発の視点」を手掛かりにして、造形教材の開発を行い、実践を積み重ねてきている。その実践における子どもたちの取り組みや教員のアンケートなどから、この視点をもとに開発した教材が、教育目標達成のために重要な役割を果たしていることも分かってきている。

2. 造形教室等への教員の参加

造形教室では、造形教材開発のために病院内学級における教育目標の明確化や「造形教材開発の視点」の考察を進めてきた。また、それと同時に、教員が造形教材開発及び授業実践で感じていた課題を解決していく手段として、教員対象の事前教材作成会や事後協議会の実施、教材・教具作成や造形教室への参加などを意図的に促してきた。表 2 には、造形教室で実施した各題材名やその内容、実施した年度を簡単に示し、同

表 1　図画工作・美術の必要性について　アンケート回答（2006～2009 年で 3 度実施したものをまとめた）

<子どもたちの実態に関して>
・何かしら表現したい気持ちを持っている　・人気のある活動　・ものをつくることが好きな子が多い
<子どもたちの自己表現に関して>
・病棟で管理されているので、自由になれる場　・自分をのぼせるもの　・好きなこと、得意なことを見つけられるチャンス
・作品にその時の心理状態も反映されやすいように思う　・入院中だから、特に言葉や思いに出せないことでも、制作活動や造形活動の中で出していくことも大切
・入院中、外泊してもなかなか今までのように色々なものに触れることも少なくなり、何かをつくり出す、自分を表現することがなくなっているので重要
・想像を含めて、それを具現化するという活動は、入院している子にとって必要だと思う。自分の現実から離れたり、思いを出したりできると考えている
・言葉ではなく自分の気持ちを表す機会になる。心のリフレッシュができ、治療に向かうエネルギーにもなると思う
・治療などで受け身的な生活が多い子どもたちにとって、つくるという行為は思いきり自分から積極的に（自由に）なれるとても良い機会である
・作品をつくること、イメージしたものが出来上がっていく喜びがある　・個性がストレートに表せると思うし、コミュニケーションが苦手な子も自然な関わりができる
<充実感・達成感・満足感に関して>
・学校や家庭から切り離され、先も見えず、不安な中で楽しみや達成感を味わえる　・つくり終えた後の充実感がある
・子どもたちがつくる過程を楽しんだり、自分のやったことが形として残ったりすることも、大事なこと（認めてあげたり、自信を持ったりすることにつなげやすいし、達成感、満足感が得られる活動）だと考える
・つくる活動が好きであるし、何かに集中しているといやなことを忘れることもできる。できた時の満足感や達成感を想像してみると絶対に必要だと思う
<素材・感覚・体験に関して>
・いろいろな素材に触れる　・触れたことのない題材、素材と出会うことができるチャンス
・特に入院中では、使えるものが限られているため、授業で様々な素材に触れていける機会は大切だと思う
<楽しむことに関して>
・みんなで楽しめる　・気分転換、つくる楽しみが味わえる　・自立活動の中でのものづくりもよいが、教科として、正しい知識や技法を学びつつ、楽しめる活動である
・いやなことを忘れて、集中して取り組める　・その過程に含まれる、できた、面白い、つくり上げた、褒められた、プレゼント出来たなどの思いを感じれる
<作品に関して>
・つくったものが形として残る　・作品ができる喜びは大きい。病状が色々な子がいて、大変な体調の子には、特にこういう機会は大きい
<ストレス発散に関して>
・入院生活の中で、なかなか楽しみを見つけられない子のストレス発散にもなっている
<その他>
・大人になって、心に残っていると思うから

時に、「きらら」教員の造形教室への参加項目も簡単にまとめた。2006 年度に開始した造形教室であったが、第１回目から教員の教材への関わりを促してきたのは、教員の多くが自分には専門的な知識・技術がなく、造形経験が少ないために図画工作・美術科の教育内容や教育方法について不安や課題があると感じていたためである。こうした不安や課題を解決するためには、教員自身に積極的に造形教室に参加してもらい、造形・美術教育への理解を深め、自分が感じている課題を見つめ直すきっかけが必要だと考えた。造形教室への参加について強制はしていないが、第１回目から現在に至るまで造形教室当日（授業）の教員参加率は、非常に高い。個人的に授業が入っている教員を除く全ての教員が、造形教室へ積極的に参加（支援・指導含む）してくれている。この参加率の高さについては、現場での図画工作・美術の授業に関する研修が少ないことも影響していると考えられるが、教員たちが病院内学級において図画工作・美術の授業を重視しており、さらに自分たちの課題解決の糸口を見つけようとする姿勢を表しているものだと言える。造形教室を開始して間もない頃、教員より「定期的に造形教室を行ってほしい。」「いろいろな別の素材も教えてほしい。」「絵画など教えていただきたい。」「知識、技術はもちろん、鑑賞などについても色々と教えてほしい。」「教員へも、図工・美術に関する勉強会のようなものを開いていただいたら嬉しい。」などの意見や要望もあり、これらはその後の造形教室実施時に反映させていくよう努めた。

3. 教員の教材研究への取り組みの変化

こちらの願いや現場教員の要望などを取り入れ、現在では造形教室実施時に事前・事後協議会の開催、教材・教具作成への参加、事前教材作成会の実施などを行ってきている。造形教室で当日実施する教材を教員が一度作成してみるという事前教材作成会については、造形教室開始当初は実施していなかった。また、造形教室の第１回目には、「きらら」の代表教員１名と 2 人だけでの事前・事後協議会を行った。しかし、回数を重ねるごとに、次第に参加する教員が増え、今では全教員で事後協議会を行っている。また、事前教材作成会に関しても、今年度に入ってから、全ての教員対象に実施しており、参加可能な教員は全員参加している。造形教室開始前の調査では、造形教材開発及び授業実践に関して、教育内容や教育方法に不安や課題を感じていた教員たちだが、これらの参加を通して、積極的に教具の作成を行えるようになったり、事前に教室環境を整えることができるようになったりなど、教材研究に対する取り組みに具体的な変化が見られるようになってきた。初年度には、こちらから指示を行い教具の作成などを行ってもらっていたが、2007 年度になると教員自らが考え工夫し、教具づくりや教室環境づくりに取り組めるようになってきた。写真１は、表２に示している題材番号４「誰の落し物？びっくりタマゴ！」を実施する際、こちらから教室をジャングルのように設定したいと提案した後、教員が自分たちでどのような教室環境が教材に適しているか検討し作成したものである。段ボールや絵具、新聞紙や画用紙

表２　造形教室の概要及び教員の参加項目

題材番号	題材名	内容	教員の造形教室への参加項目	年度
1	みんなで咲かせよう！満開きららの木	和紙染め	☆事前・事後協議会（代表教員） ○教材作成（共同作品用のパネル） ■教具作成（パレット）	2006
2	化石発見！みんなで作る化石標本	ゴム版画	☆事前・事後協議会 ○教材作成（ゴム版づくり） ■教具作成（版画台） □教室環境（水場の準備）	2006
3	ぐるぐる　ぺたぺた　ひんやり　手で感じるペーパープレート	工作	☆事前・事後協議会 □教室環境（水場の準備・椅子の配置）	2006
4	誰の落し物？びっくりタマゴ！	立体	☆事前・事後協議会 ◎事前教材作成会実施・全員参加（粘土練り，たまごづくりなど） □教室環境づくり	2007
5	宇宙と交信。ピポパ・・・！みんなで切り取る宇宙空間 ＜指導案作成＞ 指導案には、題材名／目標／時間／グループ形態／学習活動／指導上の留意点など記載	平面	☆事前・事後協議会 ◎事前教材作成会実施・代表教員参加（参考作品づくり） ■教具作成（水入れ～筆置き用の溝付き） ○教材作成（パネル制作）	2007
6	発見！きらめき海底世界～みんなでつくるきららの海～ ＜指導案作成＞	立体	☆事前・事後協議会 ○教材作成（共同作品用のパネル） □教室環境づくり（展示用の海の生き物づくり）	2008
7	きって　ならべて　はりつけて　みんなでつながる　花パズル ＜指導案作成＞	平面	☆事前・事後協議会 ◎事前教材作成会実施・代表教員参加（参考作品づくり） ■教具作成（パレット、水入れ）	2008
8	世界にひとつだけ　わたしだけのマイカップ ＜指導案作成＞	陶芸	☆事前・事後協議会 ◎事前教材作成会実施・代表教員参加（参考作品づくり） ○カウントダウンカレンダー作成	2008
9	発見！きらめき海底世界～みんなでつくるきららの海～ ＜指導案作成＞	立体	☆事前・事後協議会 ◎事前教材作成会実施・全員参加（参考作品づくり） ○素材準備（加工含む） □教室環境づくり	2009
10	ヒカリノカケラ ＜指導案作成＞	平面 立体	☆事前・事後協議会 ◎事前教材作成会実施・全員参加（参考作品づくり） ■教具作成（パレット、水入れ～筆置き用の溝付き） □教室環境づくり	2009

※教員たちは個人授業などが入っている場合を除き、全ての造形教室への参加（子どもへの支援及び指導など）した

を利用し、草むらや枝、葉っぱなどを表現している。こちらからは、教室環境の雰囲気は伝えてあったが、具体的な指示は出していなかった。しかし、その意図を教員たち自身で考え工夫し、かたちにできるようになっているのが分かる。造形教室等への参加を通して、これまで抱えていた課題と向き合い教材作成を通しながら、次第に教材研究への抵抗が少なくなると同時に、その力をつけていったものと考えられる。さらに、造形教室で実施した題材に関して、造形教室に参加した教員たちが、積極的にベッドサイドの子どもたちの学習に取り入れ実践を行う姿も見ることができた。教材研究だけでなく授業実践に関しても、教材研究と同様に造形教室への参加経験が生かされていることが分かる。

表 3 は、これまで造形教室終了後に実施したアンケート[xii]から、教員の造形教室での教材研究や授業実践に関する気づきを一覧にまとめた[xiii]ものである。造形教室開始前に行った聞き取り調査では、教員の造形教材開発及び授業実践に関する課題は、教育内容と教育方法に関するものが多かった。そのため、表 3 を見ると、教員の気づきが多い項目は、教育内容と教育方法に関するものに偏っていることが分かる。教育内容では、図画工作・美術に関する専門的な技術や知識、題材のアイデア、材料の魅力や生かし方、教材研究の重要性などに注目しており、教育方法については、題材の導入や提示方法、教具のアイデアや想像を広げる手立てなどに着目している。しかし、表 3 を総覧すると、造形教室等への参加を通し、教員の気づきが教育内容と教育方法に関するものだけでなく、教育実践に必要な教育過程[xiv]や教育評価に関するものにまで及んでいることも分かる。教育過程に関しては、子どもの実態と教育内容、時間などを関連づけて考えており、教育評価では講師の子どもたちに対する言葉かけなどを参考にしていることが分かる。また、表 3 には記載していないが、子どもの実態や様子に関する気づきに関しても教員たちから多数示されていた。

以上の事から、造形教室等への参加を通し、教員が造形教室参加前まで感じていた教育内容や教育方法以外にも、教材研究や授業実践に関することにまで視野が広がっていることが分かる。造形教材開発及び授業実践を行う際、教育内容や教育方法だけでなく、教育過程や教育評価に関する視点も必要であることを教員自身が次第に自覚してきている表れと言える。

Ⅳ　造形教材開発及び授業実践における教員の課題

造形教室などへの参加を通して、現場の教員たちには次第に造形教材開発や授業実践に関する多くの気づきや視点の広がりが見られるようになった。しかし、造形教室後に実施している協議会やアンケートでは、現在でも造形教材開発や授業実践に関する様々な不安

写真1　ジャングルの草を段ボールと絵具で表現（上）
色画用紙をねじって枝を表現（下）

や課題が指摘されている。そこで、造形教室等の参加を通して感じている教員の課題について、これまで実施してきた教員アンケートをもとに分析し、その傾向を考察していく。

表 4 は、造形教室終了後に実施したアンケートの質問項目である「造形教室に参加して困ったこと、困難だったこと、改善したいと思ったこと」をまとめたものである。表 4 に関しても、表 3 と同様に教員の回答を教育実践に関わる 4 つの要素に分類することができた。造形教室開始前には教育内容や教育方法に対する課題が多かった教員であったが、造形教室参加後には教育過程や教育評価に関する課題も増えてきていることが読み取れる。表 3 において、造形教材開発や授業実践に対する気づきが多くなっている教員たちだが、その反面課題も多く生じてきていると言える。では、各項目において教員がどのような課題を感じているかを以下に具体的にまとめる。

1. 教育内容について

教育内容については、造形教室開始当初より現在まで、現場の教員が常に専門的知識や技術、用具の使用方法などに関する課題や不安を抱えていることが示されている。図画工作・美術において、目的に応じた内容や形式、材料や用具が豊富に存在するために、アンケートを実施した全期間を通して、専門的な知識や技術などに関する課題や不安が常に教員の中に存在して

表 3　造形教室や教材研究に参加した教員の気づき

造形教室での教員の気づき			
2006年	2007年	2008年	2009年
＜教育内容＞ ・画材、材料の感触、匂い、いろいろな味わい方、見え方があることが面白かった ・身近な材料を生かした教材で親しみやすかった ・用具の正しい使い方を伝える大切さ ・教材研究の大切さ ・楽しいアイデアがとても勉強になる ・準備に教員も関わることができ、学ぶことができる ・きららの子たちに合った教材、誰にでもできて、楽しみとなる題材を提供してもらった ・ペーパープレートは、身の回りの素材のよさを生かして、しかも安全、感触遊びも楽しめお金がかからないし、こういう題材が他にもあると良い ・刃物を使用する授業も、危険と避けていた分野でしたが、正しい使い方をすることで、実は実施可能だということが分かった ・興味を引く教材準備、発想など勉強になることが多い ○普段の授業にも生かせることが沢山ありそう ○今後に生かせるアイデアをもらえた	＜教育内容＞ ・基礎基本の大切さを感じた ・教材の工夫の大切さを感じた視覚的なものや興味を引くもの等 ・勉強させられる事が多かった。 ・いろいろな材質、加工の仕方等、今まで想像もしなかったことが実際に体験でき、子どもたちと共に教員も勉強になった ・準備の大切さを学んだ ・絵の具や筆の特色や使い方、塗り方など基本的な学習ができた ・素材が新鮮で、とても興味深く、魅力的 ・事前に粘土に触れていると、子どもたちがどのように取り組んでいくのかイメージできるようになった ○粘土の人形を動かしてビデオを撮るのも面白いと思った	＜教育内容＞ ・豊富に材料を準備し、子どもの意欲や想像力を高めていくことの大切さを改めて感じた ・創作活動や教材のアイデアも参考になった ・新しい素材に出会い、そのよさを感じた ・自分で作品をつくってみると、つまずきや注意事項などが分かった ・身の回りにある素材の生かし方、新しい使い方に気づいた ・表現の幅が広がった ・技法の組み合わせ方で可能性が広がることに気づいた ・色々な手法、素材の魅力が学べた ・アイデアを学べた ・陶芸に初めて取り組みましたが、教材研究の重要性、専門的な内容（準備やつくり方、土のこと、焼くこと、釉薬のこと等）を学べて良かったです ・アイデアが勉強になった ・簡単に取り組めるのでよかった ○身近な素材で、違う場面にも使えそう ○発展させた教材もできると思った ○他のパートにも、教材の紹介を行った ○他の素材でも色々と試したい（具体案の提示） ○他の場面にも応用できそうだった（具体案の提示）	＜教育内容＞ ・身近な材料でイメージ豊かな空間や作品ができることが勉強になった ・身近にある色々なものが生かされている ・活動が単純なので、制作に自由度が生まれる ・色塗りの工夫（淡い色から先に） ・新しい用具や画材を知り扱えるようになった ・安全性が高い用具でよかった ・提示の仕方、活動の進め方で子どもたちの興味関心意欲が高まることが分かった ○材料制作活動のレパートリーが1つ増えた。違う活動への応用できる（具体案提示） ○完成後も応用できそう（具体案提示）
＜教育過程＞ ・授業の進め方が勉強になる ・単発で誰にでもできる題材を提供してもらった		＜教育過程＞ ・幅広い学年、子どもたちのペースに対応できる教材の工夫	＜教育過程＞ ・各自の体力や時間の制限に応じて活動量が加減できた
＜教育方法＞ ・一斉指導の方法が参考になった ・共同作品の大切さを感じた ・導入や子どもへの言葉かけなど、勉強になることが多い ・素材そのものや正しい使い方、イメージの持たせ方等、すごく勉強になった ・共同で行う活動が重要だと改めて感じた ・カレンダーづくりで、初めて彫刻刀を使った子がいた ・少ない人数の中で、ほぼマンツーマンに近い形で指導できたのは、ここならではのことで良かった	＜教育方法＞ ・素材ももちろんだが、提示の仕方やストーリー性など、勉強になる ・提示の仕方や発想がとても面白くて、わくわくする ・また、用具（パレットや粘土へら）のアイデアも勉強になった ・活動の方法（いろいろな素材を選択する）が良かった ・準備、導入、題材が勉強になった ・導入の大切さを痛感した ・ちょっとしたアドバイスで子どもの作品は変わってくる ・指導案の留意点の記述で、手立ての方法が参考になった ・集団であること、雰囲気や見本イメージを膨らめるための工夫、練習できる場面、やり方、使い方の伝達、認めてもらえる場の設定等が、子どもたちの集中や工夫につながっていた ・雰囲気づくりの大切さ ・自分たちで教室環境を整えたことがとてもよかった ・活動だけでなく、シチュエーションの設定も意欲を向上させる要素であることを実感した	＜教育方法＞ ・どんな素材でもアイデアと提示の仕方で魅力的な活動になることが分かった ・共同作品のよさを感じた ・教室環境も整えたことがよかった。わくわくする環境設定の大切さを感じた ・自分の想像力も高まったし、導入の大切さ、楽しさを改めて感じた ・提示の仕方を学べた	＜教育方法＞ ・写真や図鑑があると、活動しやすい子がいた
＜教育評価＞ ・子どもへの言葉かけなど、勉強になることが多い			

表4　造形教室に参加して困ったこと・困難だったこと・改善したいと感じたこと

造形教室に参加して困ったこと・困難だったこと・改善したいと感じたこと			
2006年	2007年	2008年	2009年
<教育内容> ・図工の技術や技法、知識、教材アイデア、自分の専門性の低さ、いろいろな素材（あまりお金がかからないもの）をもとにした作品づくりのバリエーション、発想が私自身乏しい ・材料費や材料の調達 ・ベッドサイドでは、使えるものに制限が出てくる。例えば、生の動植物、土、大量の水を使うことなど ・アレルギーなどがある場合、素材も限定され、感触遊びなども極端にバリエーションが少なくなってしまう	**<教育内容>** ・教員同士のアイデア交換について ・中学生の男子でも、「手軽に」できて「興味が持てる」ものが少ない ・素材や発想、方法など、すべてにおいて自分は無知である ・値段が高価な材料は継続的に取り組むには難しい ・用具、画材の使用方法 ・手軽な教材の必要性 ・実施した題材の発展教材としてどのようなものができるか ・絵の具など、汚れるものは使用しにくいので、制限があるし、ベッドサイドでは、匂いのきついものは扱いにくい ・集団で行うには時間等の調整が必要であるし、学年の幅による題材設定の難しさがある	**<教育内容>** ・用具、画材の使用方法 ・専門知識に不安がある ・陶芸の方法、過程などが分からず不安 ・参考作品の提示について ・自然物の扱いについて	**<教育内容>** ・材料集めの課題がある ・作品の保管について ・持ち帰らせ方について ・子どもの実態を把握し、それに対応した教材の準備の必要性 ・子どもの実態に合わせた準備物の提示
<教育過程> ・活動が長引くと、子どもたちの創作意欲が途切れてしまう傾向にある ・長期外泊、突然の外泊等で作品づくりが中断してモチベーションが下がってしまったり、完成に至らなかったりする ・時間の把握ができなかった	**<教育過程>** ・入退院の時期が不明確なことも多く、短い時間で出来る題材があるとよい ・やりたい気持ちは強いけれど、体調的に時間的に取り組めないこともある ・新しい用具提示のタイミングが難しい ・時間数の割り当て（見通し）について ・子どもの入れ換わりが激しい		
<教育方法> ・教具の工夫 ・個に対してねらいをしっかりと考え取り組めるとよかった ・教室環境の活用（水場が活用出来てなかった）について ・教室環境の課題（狭かった）について ・ベッドサイドや腕の動きに制限がある子の造形活動に悩む	**<教育方法>** ・手に力が入らない子がいる ・点滴を受けていたり、車いすだったりして動きが制限される ・意欲、興味づけが難しかったり、発想やイメージをふくらめてあげることが難しかったりという課題がある ・基本的に個人指導になるので、意欲興味づけが難しいし、発想やイメージを膨らめてあげることが難しい ・イメージがわかない子への手立て ・子どもへの指導方法について	**<教育方法>** ・教具の工夫について ・ベッドサイドで行う時の制限への対応・共同作品の意図を伝えておきたかった ・子どもへの指示の出し方について ・子どもへの指導方法について ・制作途中での鑑賞方法について ・教室環境の課題（狭い） ・作品を生かす展示方法、展示の工夫	**<教育方法>** ・教具、補助具の工夫について ・イメージの広げ方について ・子どもへの指導方法について ・子どもへの対応は、事前に人数や内容を確認し合うことも今後行いたい。 子どもの意欲、思いを引き出す等、制作上大事にしたいことやそのための配慮を共通理解する ・教室環境の工夫（移動の苦労） ・車いすへの対応 ・教材を置くスペースの確保 ・掲示方法について
	<教育評価> ・声かけや関わり方	**<教育評価>** ・子どもたちへの声かけ	**<教育評価>** ・子どもたちへの働きかけ、声かけ

いるものと考えられる。また、教材のアイデアや教材のバリエーションの少なさに関する課題もあげられている。これについては、ただ漠然と教材アイデアの必要性を指摘するだけでなく、子どもの実態や年齢に合わせた教育内容選択の必要性をあげており、より子どもたちの実態に合わせた教材開発に課題を感じていることが分かる。さらに、手軽に継続的に取り組める材料・用具の必要性やその確保も課題としてあげられている。どのような材料や用具が子どもたちに適しており、前もってそれらをいかに収集・保管しておくのかも病院内学級において大きな課題だと言える。また病院内学級の場合、子どもたちの病状により、自然素材に制限がある場合があり、その取扱いが課題としてあげられる。先に述べた専門的知識にも関係するが、授業で扱う自然素材や材料の性質を正確に教員が把握しておくことも課題のひとつだといえる。

2. 教育過程について

教育過程については、子どもたちの病状や体力、治療時間、入れ換わりの激しさなどから、短期間・時間で実施可能な教材が求められている。この特徴は、すでに造形教室でも把握しており、現在実践している題材は、2日間（およそ4時間）で終了する様に授業を組み立てている。しかし、これまでの実践や子どもたちの実態を加味すると、より短期間・時間で実施可能な造形教材の必要性を現場教員が感じていることが分かる。さらに、授業の進め方（時間配分や材料・用具の提示のタイミング）にも課題を感じていることが示されている。教育過程に関する課題は、今回のアンケート分析では、教員が造形教室へ参加することで、解決している傾向にある。しかし、造形授業に参観する機会や造形教育に関する研修などが少ない場合を考えると、教育過程に関する諸課題も解決すべき重要な問題であると言える。

3. 教育方法について

教育方法については、造形教室開始前から多くの教員が課題を感じていた。このことは、現場の教員が造形教材開発に関してだけでなく図画工作・美術の授業実践に対しても多くの諸課題を感じていることを表している。そのため、造形教室開始当初より、その参加を通して教育方法に関する教員たちの気づきが多かったことは、表3に示されている通りである。しかし、その気づきの多さが、課題解決に直結しているとは言えないことが、表4から分かる。造形教室等への参加後も、教育方法に関する課題は、教育内容のそれと同様に多く示されている。特に、子どもたちへの指導方法、イメージの広げ方、教室環境の工夫に課題を感じていると言える。さらに、作品完成後の作品展示に関する課題も示されている。授業内の取り組みだけでなく、完成した児童生徒作品の展示方法や生かし方に関しても課題を感じているのである。さらに、課題として多くの教員があげていた項目が、子どもの実態（病状や障がいなど）に合わせた教具・補助具の開発についてである。これまで造形教室での実践を通して、より具体的に子どもたちの実態に合わせた教具・補助具の工夫や開発に多くの教員が課題を感じていることが分かる。

4. 教育評価について

教育評価についても、教育方法と同様、授業実践時に関連した教員の課題が多く上げられている。特に、子どもたちへの関わり方や声かけに関する課題である。表3では、教育評価に関するそういった教員たちの気づきは少ないと言える。しかし、造形教室後に毎回実施している協議会においては、造形教室における指導者の子どもたちへの言葉かけやほめ方が参考になると言う意見は多く出される。しかし参考になっている一方で、表4からは授業開始からその過程においてどのように子どもたちへ関わり声かけをすれば良いのか悩み、それを課題に感じている教員が多いことが明らかになった。これらの課題については、造形教室開始当初は課題として大きく上げられていなかったが、教員たちの造形教室への参加を通して、自分の子どもたちへの関わりや声かけに課題があると感じていると言える。子どもへの関わりや声かけは、授業実践時における教員の解決すべき重要な課題だといえる。

5. 考察

今回、「きらら」の教員たちに実施してきたアンケート分析から、造形教室などの参加を通して、教員の造形教材開発や授業実践に対する多くの気づきや視野の広がりが確認された。しかし、それと同時に、造形教材開発や授業実践における課題を教員たちが多く感じていることも分かってきた。特に、授業実践においてはそれを構成する要素である教育内容、教育過程、教育方法、教育評価の全ての要素において、現場の教員が課題を感じていることが表やこれまでのまとめから分かる。これらの課題については、教員ならば造形教材開発や授業実践の際、継続して持ち続けることは当然のことである。しかし、図画工作・美術を専門としていないことで不安を抱えている教員にとっては、それらの課題を解決するための何らかの手掛かりが必要となるだろう。先に示した「造形教材開発の視点」は、その手掛かりの一つである。しかし、「造形教材開発の視点」の考察は、病院内学級の特徴や子どもたちの実態把握をもとに考察してきたものであり、現場教員の造形教材開発や授業実践における諸課題を把握・反映しきれてない面があった。つまり、「造形教材開発の視点」のみを現場へフィードバック（提示）

表5　「造形教材開発の視点」及び教員の感じている課題

No.	病院内訪問教育・児童生徒の実態	造形教材開発の視点	教材作成や授業を行う際、知っておきたいこと、困っていること、自分の課題
1	入院・治療に伴う学習時間の制約	○短時間・短い期間で行える	・作品にかかる日程、作成時間 ・より短時間で実施可能な教材
2	病気に伴う興味・関心・意欲・自己肯定感の低下	○驚きや発見があり、想像が広がる題材の設定（題材にストーリー性を持たせる、わかりやすいテーマ・目標の設定など） ○かたちや触感の変化が大きな素材や表現方法の選択 ○作品完成の喜びや達成感があるもの ○これまでに出会ったことのない画材・素材や表現方法の選択	・専門的な知識・技術 ・活動内容、工程について ・材料、用具について ・子どもの実態に合った教材の準備 ・子どもの実態に合わせた準備物の提示 ・身近な材料を使った教材例、様々な教材例（あまり費用のかからないもの）
3	生活経験不足	○様々な感覚を使い造形できる素材の選択 （触覚・視覚・聴覚・臭覚・味覚等を刺激）	・安全性 ・大部屋で教材を行う際の配慮（塗料などの匂いなど） ・材料、用具について ・材料収集について
4	病気の状態、身体活動の制限	○身体の動きを補う教材の工夫 ○弱い力で変形が可能な素材や扱いやすい用具の工夫	・教具、補助具の工夫 ・手や腕の力が弱い子どもでも使いやすい道具 ・安全性
5	学習の空白や遅れ	○造形活動に必要な基礎基本の丁寧な指導	
6	学習空間・環境の限定	○教室の雰囲気を変化させる教室環境、掲示づくりなど	・教室環境の工夫 （雰囲気づくり、車いす等への対応） ・作品展示及び掲示方法
7	児童生徒同士の交流不足	○全員の作品が参加できる共同作品の実現	
8	その他		・言葉のかけ方 ・モチベーションの上がる提示の仕方 ・授業の進め方（時間配分や材料・用具の提示のタイミング） ・イメージの広げ方 ・子どもの実態に合わせた働きかけ（内容及び人数）、声かけ、指導方法

しても、現場教員の抱える課題は解決せず、造形教材開発や授業実践が促進されない可能性がある。教員が造形教材開発及び授業実践を行っていくためには、「造形教材開発の視点」を提示すると同時に、教員が感じている課題に対する手立てや解決策を示していく必要があるだろう。

2009 年に実施したアンケートの質問事項「造形教室の教材を参考に自分で教材・教具を作成し、図画工作・美術の授業を行ったことがあるか」では、回答した教員の 7 割以上が造形教室で実施した同じ教材を子どもへ提供したり、実施した教材をもとに新しい教材を作成したりしている姿が見られた。さらに、表 3 においても、造形教室で実施した教材をもとに教材開発や授業実践に生かせる新たな具体例を提示する（表 3 下線部）姿も見られた。これは、図画工作・美術の具体的な教材案（アイデア）などの提示が、教員の造形教材開発や授業実践を促進していることを示していると言える。また、同アンケートにおいて、教員自身の課題を尋ねた問いにおいて「参考になるものが少ないために、教材が見つからずワンパターンになってしまう。」という意見も出されていた。このことからも分かるように、造形・美術教育の参考資料等が少ない病弱教育において、具体的な教材例等の提示も教員の抱えている課題解決のためには、有効な手立てと言える。

表 5[xv]には、これまで考察してきた「造形教材開発の視点」に対応させて、上記で示してきた現場教員が抱えている課題と 2009 年に実施したアンケート「現場教員が図画工作・美術の教材作成や授業を行うにあたって知っておきたいこと」の回答をまとめ、示している。表 5 では、考察してきた「造形教材開発の視点」と教員たちの感じている課題等が対応しているので、「造形教材開発の視点」を現場へフィードバックする際に教員たちの課題をより把握しやすくなっている。この表を参考にしながら、より具体的な教材例の提示や授業実践における課題に対応した回答例の提示等も「造形教材開発の視点」と共に求められていると言えよう。

おわりに

先日参加した静岡大学附属静岡小学校の教科（図画工作）研究会に、同附属特別支援学校（中等部）の教員が 1 名参加していた。その教員は、特別支援学校に

おける美術授業の参考にするために、附属小学校の教科（図画工作）研究会へ参加したとのことだった。よく話を聞くと、特別支援の現場においても体育や音楽に比べ図画工作・美術に関する研修は少なく、教員たちはその授業づくりに非常に苦労しているとのことだった。病弱教育を含めた特別支援教育における造形・美術教育の現状を身近に感じた瞬間であった。

本論では、病弱教育の現場への「造形教材開発の視点」のフィードバックを前に、現場の教員が抱えている造形教材開発及び授業実践における課題の考察を行った。この考察により、「造形教材開発の視点」の提示と共に病弱教育における造形教材開発及び授業実践で解決していくべき課題の数々が明確になってきた。今後、「造形教材開発の視点」の提示と合わせて、これらの様々な課題を解決するための手立てや解決策の提示が必要になってくるだろう。

その手立てのひとつとして、具体的な教材案や指導方法等のヒントが記載された教材集等の作成が早急に望まれるところである。これから、病弱教育現場への「造形教材開発の視点」のフィードバックと共に、「きらら」の造形教室で実践してきている造形教材を「造形教材開発の視点」や教員たちの課題と共に整理し、病弱教育で現場の教員が活用・応用できる教材集の作成に着手していきたいと考えている。そのことが、現場教員の造形教材の開発や授業実践を促進し、病弱教育における造形・美術教育の可能性を広げていくことに貢献できればと考える。

註

[i] 静岡県立こども病院内に設けられている病弱教室・訪問教育「きらら」において、図画工作・美術の授業の一環として、造形教室を継続的に実施して今年で4年目になる。現在は、1年に3度のペースで造形教室を実施している。授業形態は、小学生と中学生が同時に参加する合同授業。授業での造形教材提案や授業計画立案、進行は筆者が中心となって進めてきているが、「きらら」の教員や大学生のボランティアスタッフにも児童生徒の支援・指導に参加してもらっている。

[ii] 2009 年に教員に実施した実態調査では、教材作成の際参考にしている資料として、普通学校の教科書や保育雑誌、絵本や図鑑などがあげられた。また、教科書などは利用せず、自分が過去に経験した素材や題材を参考にする教員もいた。

[iii] 髙橋智子、「病院内学級の児童生徒のための造形教室開発―造形教材開発の視点に関する考察―」、大学美術教育学会誌 41 号、2009、pp. 135－142

[iv] 文部省、「病弱児指導事例集―実技を伴う教科の指導―」、ぎょうせい、1987、p. 8

[v] 門司美鶴、「入院中の児童の図画工作における教材・教具の工夫について」、全国病弱教育研究会　研究交流誌『病気の子どもと医療・教育』vol. 8 no. 2 、2000、pp. 18-29

[vi] アンケートは過去4年間で3度実施している。問いは、「病院に入院中の子どもたちにとって、図画工作・美術の授業は必要だと思いますか。理由も書いてください。」。

[vii] 筑波大学特別支援教育センター　斎藤佐和、「特別支援教育の基礎理論」、教育出版、2006、p. 45

[viii] 担当教員については、他の学校と同様に数年で転勤するため、造形・美術教育においても教材などの蓄積、メソッドの開発・伝達などが課題となっている。

[ix] 斎藤、前掲書、p. 75

[x] 造形教室前、現場の教員に実施した聞き取り調査では、図画工作・美術に関して、自分たちの専門的知識や経験や教材開発力、指導力不足を感じている教員が多かった。

[xi] 造形教室の目標は、「入院している児童生徒が、表現活動や鑑賞活動を通し、自らの手でものをつくりだす喜びや楽しさを実感し、生きる喜びを感じることができる。」と定めた。

[xii] 造形教室後に参加教員、学生ボランティアスタッフにアンケートを毎回実施している。内容は、「1. 感想、2. 子どもの様子を見て気づいたこと、3. 参加して困ったこと・困難だったこと・改善したいと感じたこと、4. 参加して良かったと思ったこと」。

[xiii] 内田・横出は、以下の論文で、学生が理解している造形・美術教育の内容を、教育目標と教育実践の視点から整理し、マトリックスを作成している。この論文を参考にして、今回教育実践を4つの要素に分類した。内田裕子　横出正紀「造形・美術教育教員養成課程における教科教育カリキュラム構造の研究」『大分大学教育福祉科学部紀要』24（2）、2002、pp395-403

[xiv] 内田　横出は、前掲「造形・美術教育教員養成課程における教科教育カリキュラム構造の研究」において、教科における学習の流れ（学習や教授のプロセス）を教員が教科の内容を教育的な方法によって具体的に指導していく際の「教育の過程（プロセス）」という意味から、教育の課程全般を示す「教育課程」と表現せず「教育過程」という表現を用いている。本論も同様の理由で、「教育課程」ではなく「教育過程」という表現を用いた。

[xv] 表 5 では、これまで「造形教材開発の視点」の中に組み込まれていなかった授業実践に関わる新たな視点（教員の課題）も示されている。主に授業実践における、教育方法に関する課題である（表 5 の no. 8）。